

賢い教会生活

ルカ10:38~42 / 李正雨師

最近、日本で人気を集めているネットフリックスの韓国ドラマの中で「賢い医師生活」というドラマがあります。一般的に医学や病院に関わるドラマは、手術や病院で起きているハプニングに焦点が当てられています。このドラマは、これ以外にもさまざまな話が入っています。仲間への友情、上司と部下又は先輩と後輩の関係、愛など、様々な話がドラマの中で繰り広げられています。その中で最も目立つのは、医師の姿勢、医師の精神が何なのかを分かりやすく説明しているということだと思います。他のドラマと同じように、様々なハプニングを扱っていますが、そのハプニングをうまく解決するだけで話を終わらせません。ハプニングを通して、医師なら何をすべきか、何が医師にとっては最も大切なことなのかを示します。なので、多くの現職の医師たちがこのドラマを見てレビューしていて、医師から好評を得ています。

私はこの「賢い医者生活」というドラマを見ながら「賢い教会生活」はどんなものなのかという考えを一度やってみました。何がクリスチャンの精神と姿勢であり、何が私たちが求めなければならないことでしょうか。これについていろいろな話が交わされることができると思います。そして今日の福音書の言葉もその一つだと思います。今日の福音書は短いです。イエス様以外に二人だけが登場し、イエス様はこの二人の中で一人だけと話し合われます。イエス様が一人だけと話し合われたのは、この一人が不満を持っていたからです。不満を持っている人は「マルタ」という女性であり、彼女は自分の妹に対する不満を持っていました。その不満は、自分のことを手伝ってくれないということでした。しかし、イエス様はこの不満に同意してくださいません。

今日の福音書は、2つの観点から見る方が良いと思います。一つは、この話が良いサマリア人の物語の次に配置されているということと、もう一つは、マルタが申し立てた不満をイエス様はお受けにならなかったということです。先週、福音書の良いサマリア人の話は、当時のユダヤ人に衝撃的に迫って来たと思います。ユダヤ人であるイエス様が、ユダヤ人の中心であった祭司長とレビ人よりもサマリア人を良い人として例えられたとは、ユダヤ人にとっては受け入れにくいことだったでしょう。また、イエス様はこの言葉を通して、隣人は同じユダヤ人同士だけではなく、助ける人が隣人だと言われました。これは、血統を大切に思ったユダヤ人にとっては、気になる言葉でした。特に当時、ユダヤとサマリアの関係は良くありませんでした。お互いが敵対し、根本が同じ民族でしたが、同じ民族として受け入れられませんでした。まるで韓国の南と北と同じだったと思います。私が幼い頃だけでも、学校では反共教育をしました。私の記憶では反共教育を受けて、美術時間に反共ポスターを描いた記憶が残っています。それで私は幼い頃、北朝鮮の人といえば頭に角が出ている鬼だと思いました。

イエス様の時代のユダとサマリアの状況も同じだったと思います。ユダヤから見るサマリア人は、律法を守らず、血統も混ざっている人々、律法から見ると、汚れた民族でした。ところが、イエス様はそのような民族を良い人として例えられ、隣人だと言われました。この言葉は、ユダヤ人たちにとってはつまずかせる言葉、受け入れられない言葉であったでしょう。しかし、イエス様はこの言葉を通して、神の子なら「行って、同じようにしなさい」と言われます。伝統と血統、すべての考えと価値観を超えて、互いに許し、受け入れることが、神の子たちが行うべきことでした。なぜなら、私たちもすべてを超えた神様の愛を受けているからです。そして今日の福音書は、このような言葉の後ろに配置されています。つまり、今日の福音書も私たちの既存の考えとは全く違うことを目指しているということです。

今日の福音書はマルタが自分の家にイエス様を迎え入れることから始まります。38節の言葉です。「一行が歩いて行くうち、イエスはある村にお入りになった。すると、マルタという女が、イエスを家に迎え入れた。」イエス様を自分の家に迎え入れた人は、マルタという女性です。これは当時の状況では珍しいことでしたが、一般的にお客様を迎え入れることは、家庭の代表である男性がしていることだったからです。それでは、私たちが推測できるのは、この家庭には男性がいなかったかもしれないということと、マルタがこの家庭の代表の役割をしていたということです。でも、ヨハネによる福音書第11章によると、この家には「ラ

ザロ」という男性と一緒にいたことが分かります。しかし、どのような理由であるのか分かりませんが、マルタはラザロがいたにもかかわらず、家庭の代表としてイエス様を迎え入れることになりました。

イエス様を迎え入れたマルタは、もてなしのためにせわしく働きました。40節にはこう書いてあります。「マルタは、いろいろのもてなしのためせわしく立ち働いていた。」マルタは自分が家庭の代表としてイエス様を迎え入れたので、このことに責任を果たすためにせわしく働いていました。そして、ここまでは、何の問題もありませんでした。問題はマルタがマリアの姿を見て不満を持ったことから始まりました。39節にはマルタの妹、マリアの姿が書かれています。「彼女にはマリアという姉妹がいた。マリアは主の足もとに座って、その話に聞き入っていた。」マルタの不満は、マリアが自分を助けずにイエス様の言葉を聞いていたということでした。

多くの人はこの場面を見てマルタがマリアの手伝いを受けられなかったのが、不満を持つようになったと思います。しかし、このマリアの姿が当時の社会でどのように見られたかを考えてみると、マルタの不満が手伝いのことだけではないということが分かります。今でも同じだと思いますが、お客さんを迎え入れて一緒に話し合う人のほとんどは、男性です。女性はもてなしのために台所に入って、食べ物を準備したり、お茶やコーヒーなどを準備したりするために忙しいのです。私も多くの家庭を訪問しましたが、ほとんどの女性は台所で働き、男性はリビングルームでお客さんと話し合います。そして、もてなしの準備が終わってから、女性はリビングルームに出て、お客さんと共に話します。イエス様の時代も同じでした。男性の場所、女性の場所が分かれており、性によってすることも区別されていました。しかしマリアは、女性の場所ではなく、男性の場所に入っていました。女性の場所で女性の仕事をせず、男性の場所で男性のようにイエス様の言葉を聞いていたということです。これにマルタは、イエス様にマリアを女性の場所に送ってくださいと求めます。40節の言葉です。「主よ、わたしの姉妹はわたしだけにもてなしをさせていますが、何ともお思いになりませんか。手伝ってくれるようにおっしゃってください。」

このマルタの要求は、当時の状況にふさわしいことだったと思います。もし、その場に他の人々がいたら、自分の所を守らずに男性の所にいたマリアを悪く見たのだと思います。女性の所に行き、姉を手伝うこと。これが当時の女性に求められていたことでした。しかし、イエス様はこのような要求を聞いてくださいませんでした。だからといって、イエス様が社会運動家や女性運動家のように、当時の女性に求められたことに反対したわけでもありません。「女性だからといって台所だけにいてはならない」とか「マルタ、あなたも早く台所から出て」と言われませんでした。イエス様は、ただマリアの選択を尊重して下さっただけです。そしてマルタにも、マリアの選択を尊重してくれるように願われます。今日の福音書41-42節の言葉です。「主はお答えになった。『マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。しかし、必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない。』」

私はマルタの考えと要求がひどかったとは思いません。当時の状況にふさわしいことであり、誰もマルタのように考えていたのだと思います。しかしマルタにも必要なことがありました。それは、姉妹マリアの選択を尊重し、受け入れることでした。すべてが自分の思い通り、既存の伝統通り、時代の流れ通りに進まなければならないわけではありません。自分の考えや価値観と違うからといって、それが悪いわけではないからです。

私たちは、先週の福音書を通して、当時のユダヤ人がどれほど頑固な考えを持っていたのか、私たちの隣人が誰なのかが分かりました。そして今日の福音書を通しては、相手を認め、尊重することについて御言葉を分かち合いました。このようなことは、私たちの教会生活の中で必要なものだと思います。私たちの教会生活を賢くしてくれること、私たちの信仰を豊かにしてくれることだと思います。そして、このような考えは一つに帰結されることができます。それは、まさに愛です。愛はすべてを理解し、すべてを受け入れ、すべてを越えるからです。私たちに与えられたイエス様の愛のように、愛は、すべてを完成させます。この愛が皆様と共にありますように。愛をもって賢い教会生活をなさる皆様になりますように、主の御名によって祈ります。アーメン